
白夜樹の下で。

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜樹の下で。

【Nコード】

N6284E

【作者名】

佳生

【あらすじ】

行きはよくて、帰りはこわい。それは何故か、と問う声がする。

壺 通りゃんせ

手をひかれ、長い階段を上っている少年は、ふと谷側を覗き込んだ。とても高い場所で、大地よりも空の方が大きく見える。お寺に來たというよりは、山を登ってきた、という気もする。

「おつ母、ここ、どこ？」

「天神さまに会いに行く道だよ」

繫いだ手をたどっていくと、擦り切れて薄汚れた袖が見える。母が纏うのは、丈も短くなつた着物。けれども、自分が今、着ているのは、それとは真逆の、とても綺麗な着物だつた。そういつても、貧しい農民を基準に考えての、最大限の綺麗さなのだが。

それからしばらく登っていくと、とても大きな門の様なものが見えてきて、そこを通ろうと足を進めた母親の前を、一本の棒が遮つた。

「通していただけませんかでしょうか」

「我らが天神さまに何用か。天神さまに御用のない人間は通しはせぬぞ」

とても大きな、けれども若い感じのする青年が、母親とその後ろに隠れた少年を見やる。

青年と目があつた少年は、少しばかり怯えながらも、決して目を逸らす事はしなかつた。じ、と見つめられて、青年の方が視線をそらした。

「この子の七つの祝いに、お札を納めに参りました」

そこで少年は初めて、今日は自分の生まれた日であることを思い出した。そして納得した。

今日、どうしてお腹いっぱいに御飯が食べられたのか。どうして自分だけ、こんなにもいい恰好をしているのか。

「分かった。お通ししよう」

棒を上げて道を作った青年は、深々と頭を下げる母親と、やはり自分を見つめている少年を見てから、目を瞑った。

少年の目に映っている自分とは、どんな姿であるのか。その考え事態から、目を逸らすように。

「さあ、行きましょう」

「うん」

そうしてまた、その母子は階段を上る。頂上が門から見えている程度の距離だが。今まで来た道を考えれば、全く苦にならない。

「おつ母、さっきのところにあったのって、何の木？」

「え……？」

「真っ白の花が咲いてた」

息子に言われて、母親は少しばかり考える。そんな木を見た記憶なかった。焦っていたせいだ。自分が嘘を吐いていると、門番に気付かれてはいまいかと、心を苛まれていたから。

「分からんねえ」

「おつ母にも、分からない事、あるんだ」

つないだ手を少しばかり前後に動かして言う息子に、母親の表情

が曇る。もうじき、階段を登り切ってしまう。そうしたら、自分は、この子の手を離す。

「おつ母！ あの木だよ」

階段を登りきった先。そこで少年は、門の近くに生えていた木を見つけて、指をさした。その瞬間、繋いでいた手は離されて、振り返る間もなく、母親の姿が消える。

「おつ母？」

きょとん、とした息子の声を、背中で聞いた気がした。

母親は自分の走れる、最大限の速さで、藪の中を走っていた。階段を登りきった瞬間の出来事で、息子はきつと、自分が茂みに入ったのにすら気が付かなかったらう。

「ごめんね……！」

泣きながら。泣きながら走る彼女の前で、何かが落ちた。

「行きはよいよい、帰りはこわい」

「ひっ！」

足を止めることも出来ずに、転んだ彼女に、それは薄らと笑った。人間ではない。背中にあるはずのないものが、ある。

「こわいながらも……ね」

まるで髪の毛でもいじる様に、それは自分から落ちた羽の一つを指で弄んでいた。人間ではありえないほどに白い肌をして、鷹のよ

うに鋭い目で母親を射抜く。長い髪は、風で広がってしまわぬように、見事に朱に染められた紐で結わえられている。

「女。あれは捨てるのか？」

す、と自分から視線を外し、指先で回す羽を見ながら、それは言う。

「答えよ、人間の女。あれは捨てるのか？」

余りの恐怖に答えられずにいる母親に、それは重ねて尋ねる。腰を抜かして座り込んだ彼女は、口をパクパクとさせるだけで、答えを返さない。

「どっちだ、女」

顔をしかめて近付いてきたそれに、母親は硬直する。

「……あ、あ」

「言葉が話せぬとは言わせないぞ」

ぐい、と胸倉を掴まれて無理やり立たされた母親は、あまりの恐怖に息をするのすら忘れて、悲鳴を上げられずに震えだした。その姿に、それは更に顔を顰める。

「女、何故、そこまで怯える。仮にもここまで来たのなら、何も知らずに、覚悟もなく来た訳ではないだろう？」

子供を捨てにきた。それが何を意味しているのか。子供を捨てるために、どんな危険が伴うのか。

この時代に知らぬ人間はいない。それは彼女も同じことだ。だがしかし、それを実際に見てしまうのと、話に聞くのでは違う。

「ふん。臆病ものが。貴様がよく人を育てようと思ったな。そうか……望んだ子ではなかったのか」

「……あ」

「哀れだな。捨てるものを見誤ったようだ…… よろしい。あれは我が拾う。ご苦労だったな、女」

そういうなり、手を離れたそれは、座り込んだ母親など眼中にないかのように踵を返し、そして軽く地面を蹴る。瞬間に舞い上がった枯葉と、それを舞いあげた風が母親を襲ったが、彼女はしばらくしても立ち上がらなかった。

漸く立ち上がったのは、もう日が沈むというところで。

彼女はよろよると、参道に出て、来た道を戻り始めた。息子と共に通った道を、今は一人で。

貳 天神さま

ぼつん、と一人取り残された少年は、広く開けた、白い四角い石を敷き詰めた道を歩きながら、あたりを見渡す。そして、道を外れて、玉砂利を踏みながら、白い花が咲いている木の足もとまで歩く。上へ伸びるというよりは、横へと広がり、太く立派に育っている木の幹に触れて、少年は上を見上げる。と、その枝が大きく軋んだ。

「小僧」

軋んだ枝の上に立っているのは、羽を生やした人間だった。

「聞こえんのか、小僧」

ぽかんと見上げるばかりの少年に、それは苛立たしげに舌打ちをした。

「母と同じく、口がきけなくなっただか、小僧」
「ううん」

降りてきたそれは、それでも見上げなくてはいけないほどに頭の位置が高い。この木と同じだ。

「小僧、貴様に問う」

「？」

「行きはよく、帰りはこわいのは何故だ」

問われたが、少年には全く意味が分からなかった。目を真ん丸にして見上げている少年の表情を見て、それはにい、と口の形を歪め

た。

「答えが分からぬなら良い。…まさかと思ったがな。やはり童。答えを見出す訳はない」

くくく、と笑うそれに、少年は首を傾げるだけ。

「あーそびましょ！」
「？」

目の前で笑っている男にばかり気を取られていた少年は、後ろに誰かが来ていることなど、これっぽっちも気が付かなかった。

そこには、自分と同じくらいの少年少女が十数人、笑顔で並んでいた。背中に、羽がある。

思わず少年は、自分の背に手をまわしてみたが、羽はない。

「羽が欲しいか」

男に問われ、少年は少し考えたが、答える前に、少年少女らに手を引かれて、本殿の前、地面が平たんに整えられている場所まで連れてこられた。

何をして遊ぶのだろうかと思っていたら、二人の子が、手を組んでそれを上へ持ち上げた。

「とーりゃんせ、とおりゃんせ！」

そして歌に合わせて、前の子供たちが、二人の子の間をくぐりぬけて、列の一番後ろに付く。少年もいつの間にか列の中に加わっていて、歌に合わせてくると、手の下をくぐっていた。

「こーこはどーこの細道じゃー、天神　さまの細道じゃー」

くるくると歩きながら、少年は思い出す。母親が言っていたことを。

「ちょっと、とーしてくだしゃんせ、ごよーのないもの、通しやせぬー」

門をくぐる時、そんな会話を聞いた。

「この子の七つのお祝いにー、おふだをーさめにまいますー」

これも、聞いた。

「行きはよいよい、帰りはこわい」

「?」

くすくす、と笑う声がして、少年は足を止めた。しかし、その少年を、後ろの少女が強くおした。
くすくす、くすくす。

「こわいながらも」

くすくす、くすくす。

太陽が沈みかけている、暗い橙色。その色に照らされながら、あの男は笑っていた。少年が今まで向けられたことのない部類の笑みだった。

疲れているわけでもなく、泣きそうなのわけでもなく、ただ単純にうれしい訳でもなく、面白い訳でもなく。どこか釈然としない、胸の中がざわざわとする笑み。

「とおりゃんせ、とおりゃんせ」

その瞬間、少年の前で、二人の手が下りた。そう。門番に道を塞がれたように。手を、下ろされた。行く道もなく、そして帰る道はくすくす、くすくす。くすくす、くすくす。

肩に置かれた手が恐ろしく無機質なものに思えた。少年は右にも左にも首を動かせず、ただ日が沈んで暗くなった寺の、さらに暗闇を見つめる。心臓が壊れそうだと思った。

右に居る子の顔も、左に居る子の顔も、ましてや後ろにいる子の顔も、見たくなかった。見てしまっではいけない気がした。

「つかまってしまったなあ、小僧」

「！」

「神の庇護なしに、親の庇護なしに放り出された哀れな童よ」

恐ろしく、長い爪だ。首を掴まれてみて思った。その爪が、首に食い込む。

「親がいるならば、多少は長くいられたろうに。ほんに、哀れよ」

哀れと言いながら、その瞳には哀れさなど、これっぽっちもない。ただ、変に優しい笑みから目が離せない。

ぎり、と肩を掴んでいた手が、より強く少年を捕える。この手にも、鋭い爪が。肩に食い込み過ぎて、血が滲んでいる。肩で大きく息をしながら、やっとのことで周囲に視線を巡らせた少年は、周りの子供達の異変に気がついた。

子供、人間の子供ではない。鳥。そう、鳥だ。人間と同じように

服をまとい、二足歩行で、手もあるが、その姿自体が、先ほどの様な人間らしい姿ではなくなっていた。

「まだ、子供なのだよ。子供の腹を空かして置くわけにはいかん」

ふ、と笑った。

そして少年の手をつかんだかと思うと、その細い腕に、思い切り牙をたてた。

「っ！！」

肩を跳ね上げた少年。しかし、それだけでは終わらない。

「美味いぞ。毒ではない。腹いっぱい食べ、子らよ」

思い切り地面に倒された少年。背中を強く打った少年はせき込んだが、その首に、腕に、足に。爪が食い込み、服が裂ける。

痛い。怖い。そう思いながらも逃げられない。そして最後に少年の目に映ったのは。

闇夜すら明るく照らす、純白の花だった。

参 白夜樹

『行きはよく、帰りはこわいのは何故だ……小僧』

「!?!」

目を覚ました青年は、大きく息を吐いて、額に浮かぶ汗を手の甲で拭った。その右腕が訴えるように痛み、彼はそこに手を置く。くつきりと残っているのは、人による歯型ではなく、毒蛇に噛まれた歯形に似ている。毒蛇は、特に鋭い二本の牙から毒を送る。

あの時、きっと自分にも毒が。毒がまわったに違いない。

自分は今、夢を見ているんだ。そう思ってしまう。こんな立派な屋敷に、小さいながらも個人の部屋を持って、衣食住には心配をしない。欲しいものがあれば、自分次第だが、金を貯めて買える。

記憶の彼方にある、貧しかった頃とは大違いだ。

「示天^{しあま}、起きたか?」

「ああ…起きてます。おはようございます、三縁^{みより}さん」

夢見のせいで、昔の事を思い出していると、不意に隣の部屋から、襖を叩くと同時に声がした。それは自分と同じく、この屋敷で働いている先輩だった。示天と違い、何事にも豪快で兄貴肌。面倒見もいい。

「おはようさん。うなされてたぞ。どうした」

「……いえ、ちょっと」

「腕、痛むのか？」

「まあ、多少は」

示天がこの屋敷の主人に拾ってこられたのは七つの時。その時、すでにここで働いていた三縁は、十。それから十二年。ずっとこの調子だった。

「……俺のことはいいですから、三縁さんは、お都木^{つぎ}さんのところに行つてあげたらどうですか？ 夫がいなくてどうするんです。もうすぐなんでしょう」

「お、おう……お前もな、痛えなら医者に見せんだぞ」

「分かつてますよ。子供じゃないんですから」

十二年。それだけの年が経っていた。三縁は二十二という事もある。既に妻を娶っている。同じく屋敷で働いている、お都木という女性だ。近々、子供が生まれるそうで、お都木は仕事を休んでいる。

この屋敷は働く者に優しい。屋敷の主であるとか、その家の者であるとか、働きに来ている者であるとか、拾われた者だとか、そういう事は関係ない。全員が、家族。だから、お都木は安心して子供を思えるし、三縁は安心して妻の身と、兄弟のように育った示天を思える。

だが、示天にとっては、それは時に酷く恐ろしい事に思える。全てが儚い現と消えてしまうのではないかと。

痛む腕を押えて、立ち上がった示天は障子をあけて庭を見る。部屋の正面。障子を開ければ、立派な白夜樹が見える。この屋敷に来て、一番初め自分で買って、初めて主人にお願いしたのだ。自分の

部屋の前に、この木を植えさせてくれと。

思いの他すんなりと、主人は受け入れてくれた。

主人は元から人も良く優しい人だ、了承してくれた大きな理由としては、娘が植物好きだったからだろう。

「示天！ おはよう。今日も晴れてよかったわね！」

「おはようございます。お嬢様」

主人の娘。屋敷のお嬢様。毎朝、白夜樹を見に来る女性。依^{より}里。出会った当初は六つだった彼女も、今は十八になる。町でも評判の美人だが、示天は恋愛に結びつくような感情は持っていなかった。あの日から、感情がどうにも軽薄で、霧の様な感じで終わってしまふ。大きく自分にも相手にも踏み込んでいけない。ある種の臆病さだった。

「そつだ、示天、今日の午後、空いてる？」

「え？」

「有名な一座の劇があるの。一緒に行きましょう？」

笑顔で言われ、示天は少し考える。財布事情的には問題ないが、身分、というのだろうか。屋敷の中ならいいが、外に出るとなると気が引ける。

「……お嬢様、俺よりも、もつとこう」

「いいの、私が誘ってるんだから！ お父様にも話しておくから」

「はあ……お嬢様がよろしいなら」

余り乗り気ではないのは確かだが、それでも、彼女が言うならいいだろう。そう思って、示天は部屋へと戻って、仕事着に着替える。その時、午後に着ていく着物も用意してから部屋を出た。

久しぶりに出た街は、自分が思っていたよりも人が出歩いていた。夕方になろうとしている頃。劇小屋に近付くにつれて、人も多くなる。

「おい。あの娘」

「ああ、庄屋のお嬢だな」

そんな言葉が耳に入ってきて、示天はそちらに視線を向ける。がらの悪い連中だ、と思いながらも、示天は腕をひかれて、前を向き直る。

「すごい人ね…あ、私たちはこっち」

「はい……」

入口を潜った直後、人がごった返している扉と、数人の身なりのいい人間が入っていく扉が見え、示天は依里に言われるがまま、空いている方へと足を進める。そこはよく舞台の見える場所で、一目で特等席だとわかった。

「あら、庄屋さんの娘さんじゃありませんこと？」

「そうだな…連れてるのは使用人じゃないか。身分をわきまえずにのこのこと…」

「し、聞こえますよ、あなた」

聞こえているんだが、と思いながらも、示天は、向こうの話に気付かずに、今回の劇の話をする依里の笑顔に目を向ける。彼女はたぶん、本当に平等な人間なんだと思いながら。

四 腕の傷

その劇は、一人の女と一人の男と、一人の子供の、会談話だった。夫婦の二人が、赤ん坊を抱いて、寺にお参りする場面から始まる。

お参りを済まして帰る途中、母親が足を挫いてしまった。その為に休もうと立ち寄ったお堂で、それは起こる。そこに居たのは天狗で、子供をよこせと迫ってくるのだ。断固として断る父親だが、逃げようにも母親が足を挫いているせいで逃げることもできない。

あわや全員が天狗の手にかかって死んでしまうというとき、赤ん坊の守り神として付いてくれるようにとお願いしていた天神さまが現れ、天狗を退けて、夫婦と赤ん坊は無事に家まで帰り着いたという劇だった。

赤ん坊を思う両親の心と、天神さまの偉大さを語る劇。

だが、示天の心には、とても上等な劇を見ることができた、という感想以外に、何も響いてこなかった。

自分には、両親も天神さまも、何もしてくれていなかったように思えるから。

「面白かったわね、示天」

「ええ」

そう笑いながらも、示天は右の腕を押える。少し、痛い。天狗が出てきたとき、一瞬心臓が止まりそうになった。それと同時に、腕も。劇だと分かっていながら。

「私もお父様とお母様に、ああいう風に思われて育ってきたのよね」

「ええ、そうですね」

「私って、幸せ者だわ」

上機嫌ではほ笑みながら歩く依里の足取りは軽い。反対に、示天の足取りは重いが、表情は笑顔だ。

もうだいぶ暗い。小屋を出た時点では、小屋を照らす明かりもあったし、劇を見終わり、そろそろと帰宅をする人間も沢山いた。しかし、その人も徐々に減り、今や、この道を歩くのは、示天と依里だけだ。

少しだけ、依里の声を遠ざけて、静かに息を吸い込んでみると、どこか胸の中がざわついた。

虫の知らせというのだろうか。

「……お嬢様、少し急ぎましょうか」

え？ と可愛らしく首を傾げた依里の肩に手をまわして少しでも歩みを速めようとした時だ。行く手を、遮られた。

どの様な状況でもそうだが、行く手を遮られると、どうしてもあの時の母親の顔と、あの男の笑顔が脳裏を過る。暗いと、今自分たちを囲んでいる者の中に、鳥が紛れていないか、とも探ってしまう。だが、今回も、ただの男集だ。

「この夜分に、何用でしょうか、皆様方」

依里の肩に力が入ったのが分かる。だが示天は極力、平常を装い、相手を見る。左手を袖に隠し、帯の内側に隠しておいた短刀を抜く。そしてもう一度袖を通しながら、腕に添わせるようにして短刀を構えた。

「庄屋の娘だろう？ ちょっと付き合ってくれよ」

ひひひ、と笑う男に、示天は眉を寄せる。伝染したかのように笑いだす声が、下品でも男の声でよかったと内心思っていた。これが

子供の、囁くような笑い声だったら、迷わずそれを引き裂いていることだろう。引き裂けるとも思わないが。

「失礼ですが、我々は急いでおりますので、これで。……行きましよう、お嬢様」

怖気ることなく、堂々と、男たちの横を通り過ぎる。そして完全に背を向けた瞬間に、ひゅ、と風を切ったような音が。

「きゃっ!!」

驚いて耳をふさいだ依里を庇い、示天は男たちに向き直る。今度は短刀を隠さず、前に構えて。

「悪ふざけは止して下さいませんか。お互い、痛い思いはしたくないでしょう」

「お嬢様、置いてってくれりゃいいんだ。俺たちは。なあ？」

あはは、と、また笑う。眉を寄せた示天の前を、銀の刃が通り過ぎる。だが、示天自身はそれに構わず踏み込んで、相手の腹を殴る。男は倒れて、他の男たちの動揺を誘う。その間に、気を緩めた男たちを次々に倒していき、示天は何事もなかったように依里の元へと戻ってきた。無傷、とはいかなかったが。

「示天、腕……」

「え？ ああ。これくらいは」

右の腕。古傷が痛んでいたせいか、傷がついたことに気が付かなかった。しかも、自分で、このくらい、と言っておきながら、思いのほか傷は深いらしく、血が垂れていた。

地面に垂れてしまった血を砂でごまかしながら、示天はそこを押えて、歩く。

「早く帰りませんと」

「でも、腕が……」

「手当も、屋敷に帰ってからでないとできないでしょう。さあ。またこの様な輩に見つからぬうちに」

示天の怪我に動揺したのか、前に進もうとしない依里の背を押すような形で、二人は屋敷への道を急いだ。あそこが一番安心できて、安全な場所である、と知っているから。

けれどもそれは、対人間の話であるのだが。

五 天狗

ぼんやりと目を覚まして驚いた。蒲団が凄惨な状況になっている。

「しまった」

そう思っても遅い。昨日、屋敷に帰り着いたとき、誰もが依里が襲われたという方にはかり気がいつてしまつて、誰も示天の怪我に気が付かなかつたのだ。ただ一人、依里には手当てするように念を押されたのだが、部屋に帰ってきた瞬間に、久しぶりの外出と、襲われたということへの気疲れからか、倒れこむように寝てしまったのだ。だから、今は乾いているが、傷口からは血が流れっぱなしで。そして、その間で、三縁が障子を開けてしまった。

「やった！ やったぜ、示天、お都木が、お都木が、男の……こ、えっ？」

「おはようございます、三縁さん。無事に生まれましたか、お都木さん」

「ああ、そりゃあ、頑丈そうな……違うつ！ それはもう、無事だからいいんだ、お前何あつた!？」

話せば長いんですよ、と言つてゐる間に、示天は三縁に担がれて、一応、様々な薬が置かれてゐるせいで医務室と化してゐる部屋に連れていかれた。ここには日が落ちるまで、医学か薬草の知識があるものがある。

「あらあら消毒、した？ 化膿しかけてるわ」
「昨日の夜から、全く触れてませんけれども」

微温湯で固まってしまった血を落として、傷口を綺麗にしてから、ものすごく染みる薬で傷の化膿を防ぐ。白布を傷口に巻かれながら、居なくなつた三縁は何をしているのだろうと考えていたら、その彼が血の点いた布団を運んでいた。

後で旦那様に言いに行かなくては。

「それにしても、昨日、大変だったみたいだな」

「そっちなも。ご苦労様」

生まれたばかりの子供を見せてくれる、ということと、ちょこちよこと三縁の後を付いていく。そこは一目でわかった。人が廊下まであふれている。良く見ると、旦那様と奥様までその中に混じっていて、仕事に支障が出ないか、一瞬考えたぐらいだった。

「お都木、どうだ？」

「へえ、あたしも、この子も、元気ですよ？」

朝から同じ質問を何回もしていたんだろう。お都木は呆れたような笑顔で三縁を見上げ、その横に示天が立っているのを見つけると、小さく手招きをした。

「シャマちゃん、ほら」

お都木に抱かれている、昨夜生まれたばかりの赤ん坊。劇中の夫婦とその赤ん坊を彷彿とさせる。

「小さい、ですね」

呟くと、隣で主人が笑った。

「お前だつて、こうだつたさ」
「……」

そう考えると、なんだか不思議な気がしてきた。生まれたばかりの自分は、こんなに小さくて、誰かの助けなしには絶対に生きていけない。こうして、母親がいなくては。

「示天、腕は!？」

と、ぼんやりと赤ん坊を見ていた示天に、今しがた来たのであるう依里が、父親を押しつけて示天の腕を掴む。そしてその腕は右腕で。

「…痛いですが、お嬢様」

「ごっ、ごめんなさい!」

示天の反応が余りにも薄いので、周囲の者たちは彼の傷がどれほどなのか分らない。しかし、実際に傷を見た依里と、三縁は、今のどうして示天がああ程度の反応であるのか、理解に苦しむところだ。我慢強いと言ってしまうばそれまでなのだろうが。

「大丈夫ですよ。無理に動かさなければ、すぐにでも治りますから」

そう笑った示天に、安心した様子の依里。朝から慌ただしい一日だと、示天は思った。その夜に、今度は恐怖が降ってくるとも知らずに。

その夜、主人の旧友である、という男が、ある物を持ってきた。ということ、主人と奥方、依里と、廊下を通りかかった示天が、その部屋にいた。

「この界限での流れもんでね。何でも、天狗の羽らしいんだよ」
「ほう」

それは、掛け軸だった。普通の掛け軸と同じように巻いてあり、けれども描いてある絵に、羽が貼り付けられていた。その羽は、丸められていたにもかかわらず、途中で折れることもなく、痛むこともなく、美しい外見を保っていた。

「美しいな。天狗と言わしめてもいい」
「嫌だわ、あなた。天狗は不吉よ」

怯えを含んだ奥方と、やはり恐怖を感じるのか依里が示天に少し近づく。しかし主人と旧友はそれに魅入って、話をしている。示天も、それをじっと見て、心臓の鼓動をごまかすように、必死に呼吸を整えていた。じくじくと、傷が痛みだす。

毒が、傷を痛める。

あの羽を、見たことがある。

「何という鳥の羽根なんでしょうなあ」

「さあなあ」

天狗と言ったじゃないか。そう思った示天だったが、口には出さなかった。口にしたら、あの男が現れそうで。

主人も旧友も、口では天狗と言いながら、それと言わしめる美しさがあるだけで、本物の天狗の羽根とは、思ってもいないのだろう。だが、あれは、まぎれもなく、天狗の……。

そして、示天の視界の端、廊下の向こう側で、何かが落ちた。

「貴様ら、我らを愚弄するか、人間の分際で」

視線の先に居たのは、あの男。

背に、羽をもつ人間。天狗。

「我らが同胞の羽根を、その汚れた手でむしり取った罪、その身で持つて償ってもらうぞ？」

その笑みは、あの日と変わらぬまま。

.

六七つの祝い

悲鳴が上がった。その悲鳴を楽しむかのようにほほ笑んだ天狗は、主人と旧友の手から掛け軸を奪うと、主人を覗き込むようにして目を細めた。

「償いをして貰おう。…ふははっ、我々は貴様らの言う金など欲しくもないわ。そうよなあ」

主人の考えを読んでいるのか、天狗は恐れ慄く主人らに凝視されながら、表情の笑みを濃くした。何をしようというのか。

「赤子がおるか。……昨晚生まれた、赤子をもらおう」

「っ、それは！」

「我にものを言える立場か？ 人間よ」

主人の肩に足をかけた天狗は、立ち上がりかけた主人を蹴り倒す。その時の音は、尋常ではなかった。畳にぶつかる音も、蹴られた肩の音も。奥方が駆け寄り、助け起こされた主人は肩を押さえ、脂汗を浮かべている。

その様が面白いのか、天狗は小さく肩を震わせると、首を巡らせ、示天の寝室、三縁達のいる部屋の方角へと目を向ける。

「我らが子を奪った罪、同じように返してやろうぞ」

その時の表情に、笑みはなかった。ただ、鷹の様な眼が、全員を突き刺しただけ。けれども、そんな中でも、主人は立ち上がり、よろり、と廊下へと出る。慌てて示天が駆け寄ると、主人は三縁達のいる方向、天狗が向かったであろう方角を指差した。

「赤子を、あの二人の、赤ん坊を……！」
「はい！」

後から追いつく、と言われながらも、示天は走り出していた。腕が痛いのは、もう忘れよう。あの日から、ずっと痛み続けている、この傷。広がらない毒に侵されていれ、決して消えることはない。走っていると、何やら向こう側が騒がしくなってきた。光が見えて、部屋の障子を開くと、迂回している廊下ではなく、部屋の中を突っ切ってきた三縁とお都木と赤ん坊、それに居合わせた数人の姿が目に見え込んだ。

「三縁、赤ん坊は！」

「この通りだが……おい、なんだよ、あれ！」

産後間もないというのに、これほどに走ったお都木の消耗は激しい。

「お都木、大丈夫か？」

「へえ、あたしは……」

大丈夫そうに見えなかった。明らかに顔色が悪い。そこに主人らも合流したが、それと同時に、天狗も追いついてきて、三縁達と同じように、向こうの廊下から部屋を横切ってくる。

足を挫いた母親、子供は断固として渡すまいとする父親。

あの劇と同じ。だが、ここに、天神さまはいない。それに、まだ、お参りには、行っていない。

「っ」

「示天……！」

「ほう、なかなか肝の据わった人間だ。そんなに死にたいか？」

その笑み。普通なら萎縮してしまうだろう。だが、示天は立ちふさがったまま、動かない。その表情。もう何年も、夢の中で見た。苦しめられていた。だが、そのおかげで、今はどうとも思わない。思考は正常だ。しかし、体が、腕が、一人で怯えている。

「退け、と、言っただつたんだがな！」
「ぐっ」

一瞬の浮遊感。次の瞬間の圧迫感と背中への衝撃。一瞬の錯覚。あの夜の、食われようとした直前の。

ああ、白夜樹が見える。

「……貴様、あの時の小僧だな？」

見上げた天狗は、笑っていた。そして、先ほどの衝撃で布がずれ、傷が開いた腕を持ち上げる。

「この香り、間違いない。あの時の小僧か……ようやくと見つけたぞ？ 母の身代わりで生き延びた童」

「え……」

食われようとした自分は、どうして生き残っているのか、分からなかった。だが、今、天狗は。

「あのまま逃げ帰っていればよかったものを。要らぬ感情で戻るからああなるのだ。なあ」

戻ってきた。母親は、戻ってきて、それから……。どうした。

「あ……ああ、か、さ」

毒が、回ってしまう。腕にとどまっていたはずの、毒が、全身に、回ってしまう。腕が、痛い、熱い。この耐えがたいほどの毒の苦痛、痛みなど、苦痛などではなかった。傷は苦痛ではない。本当の、苦痛は。

「うああああああつ！！」

銀色が空を裂いた。天狗は飛び退き、多少は驚いたような笑みを浮かべる。頬には思いのほか深く刃の走った赤が引かれていた。そして、人間、と思い油断していたその懷に、示天が飛び込み、短刀を振るう。

半歩下がって交わした天狗に、刃を返してさらにもう一撃。叫びながら、がむしゃらに刃を振っているように見えて、かなり正確な狙いだった。

さしもの天狗も、舌打ちをして、大きく跳躍する。そこには、白夜樹。

「ち、最後に切り返してやろうと思っていたのに」

白夜樹に吐き捨てるようにした天狗はそのまま枝を蹴って、高く跳びあがる。

肩で大きく息をしながら、しばらく空を見上げていた示天は、短刀を落とすと、その場に蹲る。

そうだ、あの時、母親は戻ってきた。自分を囲っていた子天狗達を押し退け、一度はしっかりと抱き抱えられた。だが、母は、天狗から逃れられなかった。

捕まって、奴等の、餌食に……。

「毒が……毒が……あ、駄目だ……おっ母、おっ母！」

どうしようもなく、体中が痛い。今まで溜めてきた何かが、体を引き裂こうとしているようだ。余りの痛みに、取り落としたはずの短刀に手が伸びる。

だが。

「示天！ 示天！！」

刃を自分に突き立てる寸前に、何かが。自分を突き刺した。いや、通りぬけた。それは物理的にはなくて……。

「示天、大丈夫だよお、確りして……」

泣きながら、毒の血に染まった手を握り締めてくれた、依里の声だった。

七 行きはよいよい

また、変な夢を見た。

小さな子供が泣いている。普通の人間ではない。背中にある、小さな羽はぼさぼさで、ところどころ、折れている羽が飛び出ている。周りの子供たちは一様に心配そうな顔をしているが、どうしたらいいのかわからないようで、じっとその子を見つめているだけだ。

そんな子の肩に手を置いたのは、天狗。

優しく抱き上げて、あやす様に背をさすり、彼はずっと、その子供が泣きやむまで、続けていた。

そんな、夢だった。

夢から覚めた時、どこか空虚で、冷たい空気が流れていたのを覚えていた。寒い、と思い、腕をさすると、傷口に手が当たる。不意の痛みに肩を跳ね上げて周囲を見ると、まだ夜が明ける前なのか、不気味に青い光だけがさしている。

静かだ。静か過ぎだ。

不安になった示天が廊下に出ると、迎えてくれたのは白夜樹。白

い花は、酷く温かいように思えて、木の下まで歩く。そして見つけたのは、赤い紐。上等なもので、依里がよく髪を止めるのに持ち歩いていた。その紐が、どうしてここに。

そう思って拾い上げると、その紐の先に何かが付いていた。いや、絡まっていた。絡まっていたのは、見覚えのある羽で。

「……」

背筋が凍るといふのは、このことだろうか、と。霧が晴れるような、穴が埋まっていくような。頭が、考えろ、考えろ、と命令してくる。

そして示天は行動に出た。自分の隣の部屋をのぞいて、誰もいない事に不安を覚える。そして、お都木さんの部屋にいるのだろうかと思い、その部屋を見ると。

「三縁さん！ お都木さん！？」

見ようによつては普通に眠っている状態のお都木。しかし、傍らにいる三縁は、眠っていると言うより、倒れている、と言った方が正しいように思える。お都木と生まれた子供にかぶさるようにして倒れていたであろう三縁だが、そこに赤ん坊はいない。

「三縁さん！ 三縁さん！」

いくら肩を揺さぶっても、彼は眼を覚まさない。それはお都木も同じこと。まさか死んでいるのでは、とも思ったが、それはないようだ。呼吸もしているし、怪我はない。

ひとまず安心して、屋敷中を探し回ったが、起きている人間、起きてくれる人間は誰一人としていなかった。そして、赤ん坊も。それから、依里も、居なかった。

「……」

考えられる可能性は一つだけ。たったそれだけ。赤ん坊と、依里は、天狗に連れていかれた。そして、連れていかれた場所が分かるのは、示天しかいない。

示天と母が別たれた場所、白夜樹の道、空にある寺、天狗の住処。あの場所へ、示天は戻ることを拒まなかった。

「とおりゃんせ、とおりゃんせ…ここはどここの細道じゃ…天神さまの細道じゃ」

寺の境内。石段に座り静かに眠っている赤ん坊を抱いた依里は、ちらりとその男を見た。隠しもしない羽。鋭い眼光は、今は依里にも赤ん坊にも向けられていない。

つい昨日の夜、屋敷を襲った天狗の男は、まだほとぼりも冷めないうちに、否、示天が眠り込んだのを見計らって、また現れた。赤ん坊を攫おうとして、お都木と三縁に阻まれるも、特に苦戦するこ

となく子供を取り上げた。そこまでは計画通りだった。
だが。

「ちょっと通してくだしゃんせ…御用のないもの」

「娘」

「！」

不意にこちらを向いた天狗に、依里は身を固くして相手を睨むように見る。だが天狗にしてみれば、それはただの強がりにはしか見えない。

「行きが良く、帰りがこわいのは何故だ？」

「え」

思いもしない問いに、依里は天狗から視線を外せずに、じっと見詰めたままで考える。どんな経緯でどの問いにつながるのか、一瞬分からなくなった。けれども、直ぐに思い出す。自分が歌っていた歌を。

「お、お札が…」

「ん？」

「お札が、ない、から」

何とか思いついた事を言葉にした依里だったが、天狗の方はきょとんとした顔で、暫く依里を見ていた。それから漸く表情が変わったかと思えば、天を見上げて、腹の底から笑い始めた。それに周囲の林がざわめく。

その不気味さに、赤ん坊を強く抱きしめて、依里は寺の外へと続く階段を見やる。今の自分には、あそこまで走ることすらできない。

「そのような答えを我に言っただけなのは貴様くらいよ、娘」

覗き込むように近づかれて、依里は恐怖に思わずうつむき、目を瞑る。天狗は小さく笑うだけで、直ぐ依里から離れた。そして、鳥居に向き直り、呟いた。

「それほどまでに、明確であり単純な答えならば、この世は、もっと生きやすいだろうにな」

それはどういう意味か。立ち上がりかけた依里の目に飛び込んできたのは、石段を駆け上がり、そして天狗を睨んだ示天だった。

「御無事で、お嬢様」

一瞬だけ微笑んだ示天に何とか依里はうなずくと、いきなり吹いた突風に驚いて、赤ん坊を庇うようにうずくまった。その風の主は、考えるまでもなく、あの天狗。

「待っていたよ、小僧。どうも、貴様がいると、後味が悪くてな」

「……」

「餌を餌で釣るのは、釣りの基本であろう」

その言葉に、示天は短刀を構え、天狗は大きく羽を広げた。依里はただ赤ん坊を抱いて、林に隠れた子供たちは、じっとその風景を見つめているだけだった。

.

八 帰りは怖い

風は延々と吹き続けるばかりで、林はざわざわと鳴り続ける。依里は自分の不安を紛らわせるかのように、まだ名も貰っていない赤ん坊を抱き締める。この小さな命。たった一つで、今、自分の心がどれだけ救われ、どれだけ強くいられるのか。

示天もまた、依里と同じだった。彼女がいるから、強くいられる。恐れを退けられる。

「あの頃と変わらぬと思えば…随分と大きく出るようになったものだ」

軽い足取りで示天の刃を避けながら、天狗は小さく笑みを漏らす。それは紛うことなく余裕の笑みで、対する示天には余裕などない。ただ単に、必死になっているともとれるが、目つきが徐々に鋭くなっている。

「守る事をしないのは、愚か者である証拠ぞ、童」
「っ！」

シャツ、という音が示天の耳を掠め、捻った首筋を、生暖かいものが伝う。天狗と間合いを取りながらも首に振れた手を見ると、ぬるつく血液がべったりと付いていた。遅れて痛みが精神を裂く。

「示天！」

叫んだ依里に気を取られ、そしてに視線を送ってしまった示天に、天狗は容赦なく襲いかかる。腹を蹴られて体勢を崩した示天は、それを理解しきる前に、恐ろしいほどの爆風を叩きつけられ、ざらつ

く岩の床に転がる。

「あぁっ！」

うつ伏せに倒れながら咳き込んでいる示天に、依里は後先考えずに走り寄る。そして余裕からか、ゆつたりと示天との間合いを詰めていた天狗との間に立ちはだかり、精一杯の覇気を込めて、天狗を睨みつけた。

無言で見詰めてくる天狗の圧力に負けそうになりながらも、なんとか両足を叱咤し立ち続ける。

「退け。赤子は殺さぬ」

「じゃあ、どうして連れてきたの！」

「仕返し、というやつだ。大切に思うものを奪われる。それを思い知らせてやろうというだけだ。返すつもりはないがな」

だが、と手を伸ばした天狗が捉えたのは、依里の首。

「貴様は赤子ではない。殺すぞ、娘」

その言葉を聞いた瞬間。示天の全身に何かが起こった。痛みもなければ、疲れもない。苦しさも、何もない。ただ思ったのは、ただ一つの目的は。

「離れろ、天狗！」

それは、確かな手ごたえだった。

「小僧お……」

ばたばた、と天狗の腕から滴る血は、人間のそれよりも濃く暗い赤。石畳が白い分、落ちるそれは黒く見る。示天が自分の手を見ると、そこには固まりかけの、黒い血が付いていた。自分にも、同じ血が流れている。それは、毒がまわってしまった印。

「走れ」

「え？」

「走れ、といいました」

ただ立ち尽くしている依里に示天は天狗を睨んだまま言う。その示天の声音と雰囲気、依里はゆっくりとだが後ずさる。しかし、その彼女の中によぎったのは、このまま彼を置いて行っていないのかどうか、ということ。

ここに自分がいても、何もできないかもしれない。でも、示天を置いて、行っているのか。

そうして、迷っている依里。そして、天狗が手傷を負ったときから、恨めしげに人間を見つめていた小さな二つの眼が、風の速さで林から躍り出た。狙うのは、依里と赤子。

ば、と目の前にその子供が現れて、その鋭い爪を振りかざした瞬間から、依里の目は全ての時間の流れを緩やかにとらえていた。

自分と赤子の前に滑り込み、短刀を構えた示天。子供に刃を振るおうとする示天を止める間もなく、その子供を押し退けたのは、無防備に示天の刃を受けた天狗だった。腹に突き刺さった短刀を抜き、捨てた天狗は、しかし何もできずに片膝をつく。

天狗に近づこうとした子天狗を手で制し、彼は小さく笑みをこぼした。

「この程度で死にはしない。……お前は、隠れておいで」

その言葉を聞いて、示天は依里の肩を押す。

「走って。逃げてください、お嬢様」

「でも……」

「大丈夫、追いつきます」

その時の示天の表情は、思う以上に穏やかで、そして優しいものだった。先ほどまでの必死さもなければ、攻撃性も感じられない。いつもの、否、いつもよりも強さを感じる微笑み。

それでもどこか不安そうに、振り返りながら小走りに鳥居の向こうの階段へ向かう依里を見送った示天が天狗に向き直る。彼は観念した様子で、示天を見上げる。しかし、示天も何もしない。子天狗だけが彼を睨みつけている。

「私の負けよ。母の仇をとるがよい」

目を瞑る天狗だが、示天はやはり動きはしなかった。ただ、天狗に聞こえるように呟いただけで。

「お前が死んだら、泣くんだろう」

誰が、とは言わない。

「お前は、親なんだろう。なら、殺さない。」

「……」

ふ、と天狗が鼻で笑った気がしたが、示天はその彼に背を向けて、依里が先に行った石畳の階段へと向かった。

境内の片隅にある白夜樹は相変わらず、白く輝く花を咲かせ、この全てを見ながらにして静かに佇んでいた。寂れているようで寂れていない寺も、この玉砂利も、石畳も、鳥居も、石段も。もう、見

ることはいないように思え、示天は少しばかりの哀愁を感じて、石段のひとつ目を下ろうとした。

その背に、天狗の声が。

「よせ、生^き為！」

どす。

たったそれだけしか感じる事ができなかった。

たった一つ。天狗をさして、天狗が捨てた、自分の短刀。それが背に突き刺さったというだけで、全身が鉛のように重くなり、動けなくなった。

「……あ」

石段を転げ落ちる瞬間、視界の端に捉えたのは、泣きながら恨みの目を向ける子天狗。石畳を転げ落ちてから聞いたのは、依里の悲鳴。最後に見たのは、白夜樹だった。

九 こわいながらも

「この子の七つのお祝いに、お札を納めに参ります」

それは石段を降り切ったところにある門。そこに佇んでいたのは、長いこん棒を手にした男。不意に聞こえた声に、依里は体を固くし、ゆっくりとそちらを向く。

「いきはよいよい、かえりはこわい」

言葉を音に乗せるのではなく、ただ語る様に言う男は、僅かばかりに目を細めて、自分を凝視する依里を見やり、そして視線を地面に向けた。

遠くに響いたのは、誰かの声の余韻。

佇む男と依里の間。転がり落ちてきたのは。

「示天っ！！」

全身を強く打ったのは感覚的に分かる。けれどもそれは痛みには到底届かない薄れた感触でしかない。

うつ伏せに倒れた状態で、首は依里とは逆の方向を向いていて、声は聞こえども、姿は見えない。そして依里とは逆に、姿しか見えない男。

冷たくもなく温かくもない瞳は、じつと示天を見下ろしていた。

あの日、母と見た男。自分が見た白夜樹。あの頃と変わらない姿の男は、示天を助けるようなことはしない。

「上の天狗にも問うた。が、青年、お前にも問おう。行きが良く、帰りが怖いのは何故だ？」

白い花が落ちてきた。幼い頃には意味すら理解できなかった問いかけだが、今なら分かる。行きが良く、帰りは怖い。その理由が。

「うまれて、しぬから」

「示天？」

辛うじて吐息程度の言葉で話す示天に、依里は耳を近づける。

その様を見つめる男は、全てに対して平等なものだった。天神を崇敬し、平等故に、何者の生にも死にも介入しない者。

「人は生まれて死んでゆく。それは命あるものならば当然の道理。故の答えか」

「生まれて、くるのは、いい。でも、死へ折り返すのがいつなのか分からないから」

生まれて死んで、死んで生まれて。その流れだけを理解するからこそ、それは恐れに代わるんだろうか。知らなかつたら、何を思う事も出来ない。

けれども、今思うのは、純粋な死への恐怖などではない。

「示天、話さなくていいから！」

傷にあてられた手がとても温かく思える。けれど、もう直、それすらも薄れて分からなくなってしまうのだろう。そして、それが分からなくなったら、また初めの場所に戻る。

死ぬのが怖い訳ではない。それじたいは当然のことであるから。本当に怖いのは、そう。

この暖かさに触れられなくなること。自分が思い、自分を思う人から離れること。守れなくなること。愛しいと思う、安らかさを与

えてくれる、自分の為にある居場所から、離れなくてはいけなくなる。だから。

「しぬのは、こわい」

その時に聞こえたのは何だったろうか。

いきなり泣き出した赤ん坊だったか、ずっと泣いていた子天狗か。それとも自分呼び続ける依里だったか、はたまた母親の声か。誰かの足音だったような気もする。

曖昧になってゆくのは感覚だけではなくて、その存在そのもの。

「良く生きよ。死を恐れるほどに、良く生きよ」

ああ、依里の顔が見たかったなあ。そんな事を思いながらも、示天の目が捉えているのは、白夜樹の根元と、落ちてくる白の花びら。綺麗な花びらだ。とても綺麗な花びらだ。温かそうな。できれば、白夜樹に抱かれて眠りたい。

少しだけの名残惜しさを感じながら、示天はゆつくりと瞼を下した。温かい手は、それでも自分を包み続けてくれるのだろうと思いつつながら。

十 通りゃんせ通りゃんせ

今日も、自分を見上げる小さな子供がいる。

歩けるようになって、言葉を覚えて。今ではあることないこと、様々な事を話してくれるようになった。その子は酷く自分の事を気にかけてくれる子で、いらないと言っているのに、菓子を持ってきてはそこらに置いてゆく。しょうがないから少しはもらうが、どうしても食べられないので、結果的に、よくここに来る鳥にあげてしまう。

時々鳥ではないのもいるが。

「おじょう、この白いきは、何ていうの？」

「この木はね、本当は白木蓮って言うの」

「ふうん」

「でもね、私は白夜樹って呼んでるの」

「おなまえつけたの？」

「うん。……私の好きだった人がね、そう呼んでたから」

今は誰も使っていない、というよりも公共の空間になった部屋で、自分を眺めながら、屋敷のお嬢様と子供が話している。彼女も良く、自分を見に来る。

「理輝^{りき}はこの木、好き？」

「うん！ たくさん遊んでくれるから、好き」

日長一日中、太陽にまどろみながら、時々この子と遊んで、時々叱って、時々助けて。この屋敷を見守りながら、鳥と戯れながら過ごす。

季節になれば、自分の下で、屋敷の者が花見をする。

自分なんかではなくて、桜を見ればいいのにと思えども、誰もそれに従おうとしない。夜に輝く花が良いらしい。暗い中で輝くのは、それほどまでに人の心を掴むのか。

「飽きぬか、童」

童じゃない。何度言えば分かってくれるだろう。そう思うのはもうやめた。鳥の姿で、人の上に乗っているのは、よくここに、子供を連れてくる、ただの鳥。

あの子達にはいたずらするなよ、という前につつかれてしまった。

「言われずとも分かっておるわ。あの子供、まだ六つにもならん」

七つになるまでは、守ってあげるといふ約束をしている。それはその子の母と。そして、一生守ってあげるといふ約束をした。それはその子の父と。そして、未来永劫、見守り続けるという約束を、勝手にした。それは彼女と。

「昔の事は覚えておるのか」

いや、全然。全く持って何も思い出せない。けれども、感覚として残っているものがある。たぶん、この屋敷の人間に頼まれたら、断れない。世の理に反するような、非情なものでない限り、自分は聞き入れるのだろう。

そして、また、誰かを守る約束をして、そして全てをもしりながら、自分の前を通り過ぎる風景のように眺めてゆくのだろう。子供が親になり、その子が大人になって、子供を産んで、自分と約束をする。

生きて死んでゆく命を見守りながら、昼寝をしながら、時々、子供たちと遊んで、そして花を褒められて。さらにはこの鳥の子供た

ちも見守りながら。羽根をむしられて、飛べなくならないように。

「あ！ 鳥さんだ」

「……」

あの子に指を差されて、鳥はどうも居心地悪そうにしている。そこによるよる飛んできたのは、まだ生え揃わないばさばさの羽根の小鳥。その小鳥は、鳥の隣に一瞬だけ落ち着くと、狙いを定めるようにして羽ばたきかけた。

あの子にちよっかい出す気だと思ったので少しばかり枝を揺らし、てやると、ものの見事に花にぶつかって、一段下の枝に泊まりなおして、恨めしそうに枝を啄ばんだり、爪で削ったり。痛くはないけれども、何も感じないわけでもない。

「止さないか、生為」

言われて、小鳥はよろりと、また山の方へと帰ってゆく。いったい何をしに来たのか。遊びに来たのか、と思ったところで、瞼が重くなってきた。

「また寝るのか、なまぐさめ」

別に自分は、あそこの門番らの様に頑張る必要はない。自分が見るのは、この屋敷の人間たちだけだ。

生きて死んだ者の望みであり、曖昧にしか存在しない、昔の自分が為そうとしたこと。死んでしまった時点で、人にいるか人をやめるかの選択肢が出てきた。

それにどう答えたのか分からないが、きっと眠かったのだらうと思う。でなければ、今の自分がここまで眠い理由が分からない。

「こわくない、こわくない」

鳥と話している最中にか、あの子はどこかに行ってしまったらしい。大方、母親か、もしくは父親の仕事場に行っているのだろうが、なら、別に心配する必要もない。

枝に寄りかかるようにして目を閉じた自分の根元で、彼女は微笑みながら語りかけてくる。その言葉に、いつも安らぐのはなぜだろうか。

「逝って還ってくるのですもの… 良いもこわいもないと思うわ。だから、こわくないこわくない」

ああ、そうか。そうだね、と思いながら、手のひらを彼女の頭に伸ばす。触れることはできない。だからせめて、彼女の好きな白い花を飾ってあげよう。

「私も、いつかは逝って、またいつか、還ってくるの」

そうだね。

「だって生きてるんですもの」

そうだね。そうだ。

君が言うなら、そうだろう。僕もそう思うから、そうだろう。

そう。いつか。いつか、この場所から自分が逝く日が来たら、また還るのもいいかも知れない。流れに身を任せるのは変わらない。けれども生まれる限り、誰かから、何かから、生まれて、それからいろいろなものに頼りながら、そして頼られるようになる。

それはどんなことがあっても変わらない。

だからこそ、こわいながらも、とおりゃんせ。

生きているなら、死んで行くなら、当たり前之歌。最後なんて存在しない、命の歌。続く続く歌は、きっと当たり前過ぎて分からなくなってしまうんだ。

その程度の事が、当たり前前のが、どれだけ凄いことか。
でもね、僕は分かるよ。

だから、今日もまた昼寝をしよう。そして明日も明後日も。時々遊びながら話しながら。行きが良いと、帰りが怖いを繰り返しながら。違う流れを組みながら。

これが僕らの通りゃんせ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6284e/>

白夜樹の下で。

2010年12月17日15時43分発行